

向井利夫先生に感謝申し上げます

徳島大学 河村保彦
(昭和 55 年修士、同 58 年博士修了)

向井先生のお名前を最初に拝見したのは、信州大学理学部で卒業研究に着手して間もない頃、総説誌の論説だったかと思います。当時、学部 3 年次の加藤 博先生の講義に触発されて光化学に惹かれていました。そのため、卒業研究は有機光化学の研究ができる加藤研究室を志願し、何とか希望がかない卒研を始めました。昭和 52 年 4 月に購入した総説誌に、向井先生が執筆された「シクロヘプタトリエンおよびトロポン関連化合物の光および熱反応」が掲載されていました。初学者の私にはハードルの高い内容でしたが、光および熱反応化学の高名な研究者のベストショットに、様々なエピソードを添えて研究内容を簡潔に綴られた、印象に残る著作でした。加藤先生は向井先生と旧知であり、研究室の先輩の瀬志本 修さんが加藤研から向井研に進学されていたことにも励まされて、私も向井研に焦点を絞って大学院進学を目指しました。一浪までは許容すると方針を立て卒研と受験勉強に集中しました。受験の際は面接で向井先生に試問いただき、温かい印象の先生との思いを胸に松本に戻りました。加藤先生から合格と奨学金支給をお知らせいただき、打ち震える喜びを感じたことと、その後直ちに向井先生から励ましのお便りをいただきましたことは、今も深い感謝の念に絶えません。

その後仙台で生活が始まりました。最初は第一線研究室の雰囲気のにまれ、また要領も得ず、今となってはもう少し自分自身が内省的に過ぎず貪欲であれば良かったと思います。しかし大変ありがたいことに、諸先輩方が見出して下さっていた研究成果に、熊谷 勉先生のご指導のもと私のわずかな成果を付け加え、向井先生に構造有機化学化学討論会で口頭発表する機会を与えていただきました。併せて、同じく修士 2 年の時には研究室のセミナーで、著名な Richard A. Caldwell 先生（テキサス大学ダラス校）に研究報告の機会もいただきました。

向井先生は、諸先輩も様々な機会に述べておられるように、とても健脚であらせられました。栗駒登山の折だったか、我々学生は息も絶え絶えなのに先生は平然と歩みを前に進めておられました。その時のご様子は今もはっきりと思い出されます。また、学位取得後のポスドク応募の際も、当時まだ余り国内に情報のなかった Gary B. Schuster 教授（当時イリノイ大学アーバーナ・シャンペーン校）について、国際会議等を通じて知られた様子や人となりをご教示いただきました。私は Schuster 先生を第一希望の留学先としていましたので、向井先生や戸田 敬先生、宮仕 勉先生からいただいた情報はとてもありがたく、また鼓舞されるものでした。その後、向井先生や高瀬嘉平先生に書いていただいた推薦状のおかげで、私は希望通り Schuster 研の一員としてイリノイに参りました。渡米留学中に夏季休暇をいただき仙台で結婚式を挙げましたが、その際も向井先生ご夫妻は快くご仲人をお引き受け下さいました。向井先生は先述の通り登山を始めスポーツマンで、ゴルフも愛しておられました。義父が向井先生をお誘いして、塩釜のコースをご一緒させていただいたことがありました。そのような形で、ご多忙の先生が義父と親交を深めて下さったことを本当にありがたく思っております。

その後、向井先生のお計らいで当時徳島大学工学部 増村光男先生の研究グループ（応用化学第三講座）に勤務しておられた山下敬郎先生が仙台に戻られた後、私は増村先生の後任の堀江徳愛（ほりえ とくなる）先生のグループに勤務させていただくことになりました。その後私は学部長、研究部長等を任じられた上、一昨年春に定年で教授職を退任しました。現在は大学本部で理事・副学長を務めております。向井先生は、お目にかかる度四国の最高峰、石鎚山に登ってみたいと仰っておられました。中国四国地区に縁のある方々や門下生も多々みえますが、その機会を逸してしまいましたことが返す返すも残念に思われます。逝去される数年前にご挨拶にお伺いしました際、先生と膝を交えてお話しできましたことが、直接先生とお話しできた最後の機会となってしまいました。

今も居室には、私の教授就任時に向井先生にご報告に上がりました際、揮毫いただいた色紙を飾っております。「ほどほど人生」－これは、日頃より向井先生ご自身が心に抱いておられた一言でもあったのでしょうか。私はこのお言葉を勝手に「バランス感覚」と理解し、丁寧に聴き偏らずそして俯瞰的な視野で物事を判断するよう心しています。しかし、実際有意義ながらもほどほどにやっていくことの難しさを日々痛感しています。来年度から学長としてまだしばらく徳島大学にお世話になる予定ですが、向井先生の人となりやご薫陶を常々思い出させていただき、誇りを持って務めていきたいと思っております。

恩師 向井利夫先生へ深甚なる謝意を捧げますとともに、ご冥福を幾重にもお祈りし、筆を擱かせていただきます。ありがとうございました。

